

## ▶ 第3章

# 新型コロナ禍とグローバル保健ガバナンス ——米中対立の影響をいかに緩和するか

東京都立大学法学部教授

詫摩 佳代

### 【ポイント】

- ▶ 感染症への対応は、協力した方が互いに利益を得やすいからこそ、政治的対立が起きている最中でも協力が進展してきたという経緯がある。こうした前例とは対照的に、新型コロナを巡っては協力よりも対立が顕在化してきた。その背景としては国際政治要因、グローバル保健ガバナンスの構造的課題点、WHO（世界保健機関）のパフォーマンスの問題という、大きく3つの要因が複合的に関係している。
- ▶ グローバル化が著しく発展した今日においては、感染症は公衆衛生という閉じられた領域の一課題から、安全保障をも含む広義の文脈の中で位置づけ直されてきた。
- ▶ 米国不在の中でも、主にミドルパワーによって新型コロナ収束に向けた様々な努力が行われてきた。米国のバイデン政権はその流れに合流するものと期待されるが、今後も米中間ではWHO改革、新型コロナ発生源調査、そしてワクチンをめぐる問題に関して、対立が継続することが予測される。欧州や日本といったミドルパワーが米中対立のインパクトを和らげる努力を行うべきである。



注目データ

### 保健協力における米中の争点

争点	米国	中国
WHO改革	初動対応においてWHOにより強力な権限を持たせるべき	欧米の提案に消極的
新型コロナの発生源調査	武漢の海鮮市場で動物から人への感染が起きたのか、あるいは中国の他の地域が発生源かを明らかにしたい	中国以外が発生源である可能性を示唆
ワクチン	COVAXを通じて公平なアクセスを実現する	中国産ワクチンを用いたワクチン外交を展開

資料：筆者作成